

Business School を卒業し、今思うこと

第2期 OB 内藤 聖一

こんにちは。小野晃典研究会第2期の内藤です。この度はOB・OG会誌第4巻発刊おめでとうございます。

現在私は2010年3月に慶応義塾大学大学院経営管理研究科（通称KBS、慶応Business Schoolの略）というBusiness Schoolを修了し、国内不動産ファンド運用会社に勤めております。KBSやMBA, International exchange program student（以下「IP生」という）として派遣していただいたUniversity of Chicago Booth School of Business（以下「Chicago Booth」という）、ケースメソッド等に関する詳細は、OB・OG会誌第2・3巻に記載しておりますのでそちらをご参照ください。

◆MBAは価値があるのか

MBAは価値があるのか?という質問を受けることがよくある。質問を受けた際には私個人の経験から、MBAは価値がある、ただしそれは人によって異なるだろう、単なるMBAホルダーになるだけでは価値がない、と答えている。よく雑誌記事等でこの類の特集が組まれることがある。

アメリカにおいては日本よりもMBAの地位が社会的により高く認知されているため、むしろどのBusiness Schoolに価値があるのか、にフォーカスされている。キャリアアップに有効か? 履歴書に書いて見栄えがするか? 転職後の初任給はいくらか? もちろんこういった「履歴書に箔をつける」ということも重要なのだろうが、それだけでは単なるMBAホルダーどまりなのである。誤解を恐れずに言うと、MBAホルダーになることそれ自体はさして難しいことではない、ある程度のお金をためて、入学試験をパスすれば（どのBusiness Schoolにいくのかにこだわる場合、ここが勝負どころとなるのだが）、よほど落ちこぼれない限り、Business Schoolは卒業できる、つまりMBAホルダーになれるのである。ただKBS, Chicago Boothの両校の生徒たちを見てると、同じMBAホルダーでも大きく2種類に分かれるように思える。

一方は与えられたカリキュラムをこなすことに終始する人々、もう一方は与えられたカリキュラムを単にこなすのではなく、自らに必要とされる課題を見出し、必要であれば周囲を巻き込み、解決していく人々。後者の人々に共通する点は、①自らの確固たる価値観、個を確立している、②その価値観に基づいて能動的に、積極的に行動する、という点である。その差は歴然としている。

長々と書いたが、MBAホルダーとなることが目的化してはいけない。MBAを価値あるものにしたければ、Business Schoolという場を使って何をしたいのか、明確にしなければならない。単にカリキュラムをこなすだけの人々でいいのであれば、何も高い授業料払ってBusiness Schoolに行く必要はない、globisの本でも買って自習すれば済んでしまうのである。繰り返すが単なるMBAホルダーになるだけでは意味がない。毎年世界中から数千人単位でいわゆるMBAホルダーが輩出されるのである。そのうちのone of themになるのか、only oneになるのかはその人次第なのである。

◆Business School を卒業し、今思うこと

本当の勉強はここから、ということである。感じたことは2つ。1つは、MBA で学んだロジックが即ビジネスに役立つことは少ないということ。もう1つは、個人の力で生み出せだせるものは少なく、大きな事を成し遂げるには、周囲を巻き込み、周囲の力を得られるような人間性を身につける必要があるということ。

2年間みっちり勉学に勤しんで、勉強は懲りた？ と聞かれることがある。しかし本当の勉強は MBA 後に始まる、むしろ座学だけではなく、実戦での試行錯誤の経験、ビジネスにおける仮説・検証を積み重ねることによって、本当の力が備わっていくのだと思う。仮説・検証は小野ゼミでも強く意識されていたことであり、それはビジネスにおいても MBA においても重要だが、MBA に行ってもよかったですと素直に思える点はビジネスにおける仮説の立て方、精度が飛躍的に上がった（であろう）ことである。MBA では様々な企業の manager として fact の整理、仮説検証、意思決定の鍛錬を繰り返し行う。仮説を立てる上で様々なケース・文献・論文を紐解き、クラスディスカッションの中で意見をぶつけ合い、擬似検証の末、擬似意思決定を行うのである。ここであえて擬似、と書いたところが MBA の限界なのである。

MBA はあくまでもクラスの中で行われるのであり、実際の取引会社や顧客等からの反応を伴わない。よっていかにクラスディスカッションの中で、誰からの批判にも耐えうるロジックを用意したとしても、それが実社会において通用するものなのかはこの段階において未知数なのである。

自分なりの仮説を実社会で検証することで得られる試行錯誤の経験が重要であり、そういった意味で本当の勉強は MBA 後に始まるのだと思っている。この「勉強」に終わりはないわけで、その意味で一生勉強し続けていくことになるのだろう。

もう1つ、大きな仕事を成功に導くためには人一人の力では不十分で、他者からの協力が不可欠である。エリート層になればなるほど、この net work の重要性を心得ており、ゆえに Business School は将来有望な人材とどれほど親密な関係を築くことが出来るか、という一種の社交場でもある。当たり前の事かもしれないが、これを実行に移すのは難しい。なぜならビジネスにおける真の net work は、己の実力を認められ、かつ絶え間ない give and take を繰り返し、信頼を勝ち得ることによって構築されるものだからである。

幸運にも group work を通して知りえた友人や、Chicago 滞在中夫婦共々大変お世話になった、若手の韓国人経営者夫妻等、短い留学期間で国外にも信頼の置ける net work を築くことができた。現在の仕事では、日本だけでなく世界の不動産投資マーケットに精通する必要がある、こういった意味で日本外に net work を築く事が出来たのはこの上ない喜びであり、また将来に向けた楽しみでもある。